

# 誰が継いでも「私」 価値を生み出す



## 皆川 明氏

デザイナー  
ミナ ペルホネン創設者

1967年生まれ 東京都出身。1995年に「minä perhonen」の前身である「minä」を設立。ハンドドローイングを主とする手作業の図案によるテキスタイルデザインを中心に、衣服をはじめ、家具や器、店舗や宿の空間ディレクションなど、日常に寄り添うデザイン活動を行っている。

デンマークのKvadrat、スウェーデンのKLIPPANなどのテキスタイルブランドへのデザイン提供、新聞・雑誌の挿画なども手掛ける。

ブランドの展覧会として、スウェーデン国立美術館で開催された「DESIGN = MEMORY」、韓国・ソウルの東大門デザインプラザ (DDP) で開催中の「minä perhonen design journey: the circle of memory」など。

モノを作るのは好きだけど何となくはみ出して  
褒められたり評価されることがなかった子どもの頃  
人生の先にモノ作りがあるとは思いつかなかった  
目指していた陸上をケガで断念 逃げ道に選んだ北欧への旅  
その最中偶然パリコレのアルバイトに出会う

大事にしたかったブランド名  
余ったモノで更に新しい

父親のように40年間は辞めないと決意しファッションの道に魚市場でアルバイトをしながら27歳で独立しファッションの方程式を覆しながら価値観を生み出す世界進出より来日する人達に知ってもらおう環境を作ることを目指すのは「せめて100年つづくように」……



## 中原慎一郎氏

株式会社コンランショップ・ジャパン  
代表取締役社長

1971年生まれ 鹿児島県出身。大学卒業後上京、2000年ランドスケーププロダクツ設立。東京都渋谷区にてオリジナル家具等を扱う「Playmountain」、カフェ「Tas Yard」などを展開。2022年4月現職に就任。2023年4月にザ・コンランショップ初のアジア編集の店舗となる代官山店を、同年11月に麻布台ヒルズに日本最大規模を誇る東京店をオープン。2024年8月三重県多気町にザ・コンランショップが初めてデザイン監修したホテルHACIENDA VISON(ハシェンダ ヴィソン)がオープン。家具を中心としたインテリアデザイン、企業とコラボレーションしたプロダクトデザインも行う。デザインを通して「良い風景」を作ることテーマに活動中。

## スタート時の目標は とにかく40年続けること

**中原** 今日はファッションブランド「ミナ ペルホネン」のデザイナー、皆川明さんにお声かけさせていただきました。宜しくお願いします。

**皆川** こちらこそ宜しくお願いします。

**中原** 皆川さんと初めてきちんとお話ししたのは二期倶楽部の時でしたね。

**皆川** 2007年ですからもう17年になります。那須のホテル「アートビオトーブ那須」の6部屋が1部屋ずつ作家さんやデザイナーさんに振り分けられて、部屋をコーディネートするのようになって。その時に一緒に夕食も同じテーブルでしたね。それより前から、中原さんのお仕事はもちろん存じ上げていました。

**中原** あの時「部屋の設えだけ」と言われて部屋のコーディネートをやっていたのですが、皆川さんは部屋の中だけではなく、ホテルの前にあった水盤の中に入って石を積み上げていて部屋から見える景色の設えもされて、素晴



皆川 明氏

らしいとすごく印象に残っています。

**皆川** その後何度か会うようになって、中原さんがアメリカの西海岸、ロサンゼルスとかサンフランシスコの旅に連れて行ってくださいましたね。「いつか行ってみたい」と何年間も言い続けて。

**中原** 「アメリカに行ったことがない」とおっしゃっていたので、サンフランシスコとLAを車でツアーをさせていただきました。アメリカにいる知り合いが皆川さんのモノ作りをすごく尊敬している人達が多かったので、みんな驚いていましたね。

**皆川** 車で10日間程のなかなか濃い旅

で、すごく印象的でした。

**中原** 皆川さんがモノづくりやデザイナーをする上で原点になっている「始まり」や「きっかけ」などについてお聞かせいただけますか？

**皆川** モノを作るのは保育園の頃から好きでしたが、周りの子達のように上手に出来る感じではなかったですね。今でも覚えています。馬のようであり

スのような、様々な動物をミックスして作った空想のモノで、それは先生からすると何かワケの分らないモノだったのだと思います。学校教育に言うのと何となくはみ出して「上手」「下手」というより、ちゃんとしていない。学

校にもなかなか行かず、途中で抜け出してしまったり。モノ作りは好きでしたが評価はされませんでした。学校で何か褒められたという経験はありませんでしたが、粘土で作る事はその頃から大好きでしたね。学生時代はずっとスポーツをしていたので、それ以降もモノを作るという事が自分の中で「得意なもの」とか「評価されるもの」という認識がないままで、モノづくりが自分の人生の先にあるとは思いませんでした。

**中原** 美術系の学校ではなかったのですか？

**皆川** どちらかといえば陸上をする為に高校を選び、その先に体育大学がありました。日体大の駅伝部の監督が高校の顧問をしていたという理由で、その高校に行ったみたいなきっかけです。

**中原** 駅伝ということとは長距離ですね。

**皆川** ええ、そうです。

**中原** 僕にとつて皆川さんは不思議な存在で、美術的な背景の中から生まれ育ってきたのではないだろうと思っていました。やはりそうでしたか。

**皆川** 後にファッションスクールに入って卒業したことにはなっています

が、そこでもとても優等生とは言えませんでした。

**中原** 僕は実家の飲食店を継がなかった親不孝者なので、代々家を継いで職人になる人に憧れがあります。気づけば、他人がやっていないジャンルに結果的に挑戦している人が周りには多くて、皆川さんは正にその最たる人です。

**皆川** 日本経済のバブルが弾けて、いろいろな産業の正しい方程式のようなものが1回壊れて、その時僕らはそれぞれの業界で経験を積みながらこの先は企業規模を大きくすることが是ではなく、自分達の方法論を自分達のやり方で進めていく方が心地いいのでは、みたいな考えが根底にありましたね。心地良さだけではなく、体制が壊れたというか、今迄の方程式が壊れたタイミングで、そこまでに経験してきたキャリアが次の事を考えさせてくれたというのは、中原さんの業界でもファッション業界でも近いものがあるのかなあと思っています。このまま大量生産大量消費で本当にいいのかを考えるきっかけが90年代半ばにはあったと思いますね。

**中原** 確かにそうですね。すると、元々ファッションに興味があったわけでは

なかった、ということですか？

**皆川** ええ。本当に陸上を目指していたので、怪我が幸いして体育大学という進路がなくなってしまうと、皆が進学していく中、何となく体裁を整える為当時の10代の若者が考える「逃げ道」として海外に数ヶ月行きました。偶然と言うか、天邪鬼などところがあるのでメジャーな国よりも「知らない国」へ行ってみようと思いい、祖父母が輸入家具屋をしていた関係で、フィンランドやスカンジナビアに興味湧きました。でもあまり下調べもせずのすごく寒い冬に行ってしまった……(笑) 防寒着も何もなくて。



中原慎一郎氏

**中原** フィンランドのどこに惹かれて行かれたのか、すごく興味があります。

**皆川** 後々、スウェーデンやデンマークに行つて、「北欧と言つても国によってカルチャーも人も暮らしも違うし、そもそもDNAも違う」ということを知りました。日本にとっても親和性を感じたり、現地のバーに「東郷ビール」があり、後になって独立のきっかけが日露戦争だったのを知り、段々と関心も深まり居心地の良さも相まって、何度も行くようになりました。

**中原** 超親日国ですよ、居心地も良かったのですね。

**皆川** バックバックを背負つてユース

ホステルに泊まりながらでしたが、その当時はヒッチハイク的に手を挙げれば乗せて行つてくれたりして。まだ10代でしたが「すごく親切な国」という印象でした。歴史的なことは分かりませんが、北欧の、ある種先進的で経済も発展した国というよりは、少し奥手

な民族意識が何となく日本人のメンタリティとちよつと近いのかなと感じました。その時たまたまバリコレのアルバイトを紹介してもらつて経験したことで、職業を考えるよりこれに出会うのだからと、単純な理由でファッションの道に決めたのです。

**中原** その時に「これだ！」という感覚にはならなかったのですか。

**皆川** どちらかというと「何か決めてしまった方がいい」という感じでした。帰国後、夜間のファッションスクールに入りましたが課題がなかなか出来ず「すごく不器用だ」ということを自覚するので、決めたからには、「辞めない」ことだけを決めてしまおうと思いました。それは父親が普通として企業で働いて定年を迎えた姿を見ていたことから。父親が40年続けた事を「無理無理」と言われる職業で続けられた

らそれだけでもいい、という感覚がありました。その頃は縫製工場に勤めていて、縫う工程ではなく裁断という、型紙を当てて布を切る単純作業をしていて、デザイナーというより工場で「作る」ことをやっていくのかなと想像していました。

**中原** 夜間にファッションスクールに通いながら働いていたのですか？

**皆川** ええ、19歳から縫製工場で働いて、オーダーメイドの小さなアトリエの型紙職人として3年、もっと小さな3人位の工房で全体のアシスタントとして3年程働いて、27歳の時に独立、「自分で洋服を作る」ことを始めました。来年で30周年になります。ブランドとして確立したわけではなく、縫製工場で働いたりオーダーの店で型紙を引いたりしていたので「一応自分で1着作れるぞ」と始めたのです。有名なブランドにいたこともないし後ろ盾もなく、何の手掛かりもなくスタートしました。

**中原** 自信はあったのですか？

**皆川** 自信というより「40年続ける」と決めていたので、上手くいくかないかはあまり関係なくて、魚市

場で働いたりアルバイトをしながら服作りを始めました。

**中原** 築地の魚市場でアルバイトさせていたのですか？

**皆川** いえ、八王子の総合卸売市場の店で働いていました。築地にはマグロのセリをしに毎朝行って、行かない日は八王子の店で主にマグロをさばく仕事を4年間していました。

**中原** ファッションと真逆のような……。

**皆川** 真逆なので気分転換になったというか、今思えば、そうでないところと辛かったかもしれませんね。

**中原** それ、分ります(笑)

**皆川** 違うブランドの手伝いなどしていたら難しかったかもしれないですね。単純に朝昼まかないが出て、夜はその日の魚の余りをもらえたので、食費がかからない環境は有難かったです。

**中原** ご苦労という感じでもなかった……？

**皆川** 苦労ではなく、それまで料理をしていなかったのに、料理に関心を持つようになりました。必然的に包丁を使って魚をさばくようになって

て楽しかったですが、体力的にはやハードな面はありましたね。

## マスに受けなくていい 「10万人にひとり」を目指す

**中原** 僕も、今でこそザ・コンラン

ショップで働いていますが、80年代の後半に初めてロンドンに行ってザ・コンランショップを見て驚きました。90

年代に東京のヴェンテージの家具屋さんで就職していた頃は、何だか古いものに興味を湧いてザ・コンランショップだとかいうのは頭から若干外

れて、逆にそこで古いモノから様々な事を学んだ時期でした。独立したのが1998年頃で、2001年にイームズの展覧会をやって皆川さんのお仕事を知りました。アレキサンダー・ジラルドとかのテキスタイルデザイナー

がああの時代にいたというのを知ったのが驚きで、「現代の感覚でこういう事を出来る人がいるのが、凄い」というのが、その時の率直な感想です。

**皆川** 2000年でしたがこのプレスルームは初めての直営店である白金台店としてオープンした場所で、その頃かもしれませんね。今のザ・コンラ

ンショップのセレクトのように、現代のモノと古いモノみたいに振り幅を持つて社会を見る感じが、中原さんにはずっとあるなと感じます。

**中原** 新しい古いに関係なく、自分が新しいと思ったものに飛び込んでいましたね。そういう時に昔の人にはもう会えませんが、現代の人でそういう形でやっている人がいると様々な事が前進するのが分って刺激になりました。何かやりたくなっていた時期だったので、皆川さんのお店に伺って「素晴らしいな」と思ったのが最初でした。

**皆川** ありがとうございます。

**中原** 皆川さんにはそこで影響を受けた昔の人はいらつしやいますか？

**皆川** 洋服で「素晴らしい」と思ったのは、創業当時のバレンシアガでした。学校では洋服は前身頃と後身頃の「前後」と教わっていましたが、クチユリエ界の建築家と呼ばれたバレンシアガは、360度見ていく。建築家は確かにそうだと思いますが、初めて人体が前と後ろではなくグルッと一周しているというところに気付き、バレンシアガの写真集をよく見ていました。テキスタイルでは強く影響を受けた方はいませんが、強いて言えば、19歳でフィン

ランドに行つて、マリメッコを見た時に、日本人の石本藤雄さんという方がクリエイティブディレクターをされているのを知って驚きました。

**中原** 当時は、絵が主体ではなかったですね。

**皆川** 始めたばかりの頃は、本当に目の前の工場さんがやれることを自分なりに勉強して「こんな事出来ませんか？」とささやかなテキストイルを作っていた感じでした。

**中原** ファッションのブランドを起ち上げられた時に、こういうモノを作っていたいとか、いわゆるコンセプトというのとは、どこからイメージを持つてられたのでしょうか？ それとも、ご自身で自由にいろいろなものを作られる才能から生まれてきたのでしょうか？

**皆川** 少し天邪鬼的な視点から、その時代にメインストリームになっている事へのカウンターに関心があります。つまりほとんど海外で大量生産して、安いモノを大量に作る時代に、素材から作つて少量で日本の工場で作るといふ、全部反対のプロセスを選んできながらファッションブランドとして成立することは出来ないのか……と。そ

こへの関心があつて、「素材から作つてみよう」ということや、シーズン毎にファッションのサイクルが変わるのではなく、1回作つたモノがいつまでも作られ続けるとか、ファッションの方程式的な事の反対側のプロセスを踏んだり、その価値観を生み出すことで自分のブランドを継続できたら、価値の振り幅が大きくなるなど思いました。

**中原** 軌道に乗り始めたのはどれくらい経つてからですか？

**皆川** 軌道に乗つたわけではないのですが、アルバイトを辞めて何とか洋服だけで暮らせるようになったのは5年程経つてからでしょうか。

**中原** 会社化したのはいつですか？

**皆川** 1999年だったと思います。

**中原** 自分が会社化したのは2000年でした。本当に他のデザイナーさんと全く違う道を歩いてこれたのですね。

**皆川** いわゆる師匠のような方がいませんでしたので、ファッションショーをしなければとか、夏になったらセールをととか、そういう考えがありませんでした。とにかく反対側にある方法は何だろうという関心がありましたね。

**中原** いわゆる体制ではないようなモノが受け入れられる時代と言いますか、そういったものがフィットしたという事はありますか？

**皆川** 結果的にはそうかもしれませんが、それにしても、その頃はとても小さな活動で10人に満たないスタッフで、皆が暮らせるようにという規模感で計算をして。日本の成人女性が数千万人いる内の数万人にひとりだったから1000着作る。当時自分達はひとつのデザインで100着ほどしか作らないから、「そうか、数十万人にひとり、誰かが買ってくれると思えば成立するかもしれない」という計算でした。

**中原** 確かに、モノが売れるつて不思議に思う時があります。「この人、どこから興味持つて来たのかなあ」とすぐく思いますね。

**皆川** ファッションは「トレンド」を気にせず、例えば共感者が10万人にひとりでもいいと思うと、相当好きな事がやれます。何も制約がなく、布から作つたり出来る限り良い材料を使つたり、10万人にひとりの共感者と出会うのは最初は大変かもしれませんが、やがては共感者が増えていくだろうか、と

思っていました。

**中原** ゆつたりとした性格ですか？

**皆川** でも計算はされているのですね。

**皆川** そうですね。100着でも10万人にひとり……と。ロジックというか、確率を考えますね。

**中原** とても珍しいタイプのファッションデザイナーですね。

**皆川** 本来、デザイナーは1000着作つて1万人にひとりの共感者なら0.01%、10万人にひとりなら0.001%です。その中に共感者がいれば継続するという世界だと思つています。自動車産業ではないので、そう思えば皆、自由にやれば良い業界だと思つています。「オリジナルで布を作るといふのには、いつかネタが切れるのでは？」とか「セールをしなかつたら余つてしまわない？」とか、「そんなことしていたら続かないのでは」などとよく言われました。

**中原** 「ミナ」という会社を創つたのが1999年ですよ。ブランドが始まつたのが先で会社の方が後ですが最初から会社しようと思つておられましたか？

**皆川** やがては会社の方がいいな、とは思っていました。5人くらいの状態

で会社になったと思います。始めてすぐの頃に、その皆が生活できるようにできれば、社会の中で「存在している」という状態にはなるのかな、という感じはありました。小さいですが、工場さんなどの関わりもでき、社員の人も100人いればそれなりに暮らしを自分達の仕事でケアしているという状態になり、社会的な役割もそれ位にはなるだろうと。ちょうど来年30周年で、およそ今200人程度です。自分の人生の中で何となく社会性のある状況に到達するといいなという気持ちがあつて、その為には個人より会社がいいのかな、と考えていました。やがて、次の人にバトンタッチするということも含めてですね。

**中原** 創った時の会社の中身というのは、いわゆるアパレルだと思いますが、アパレル以外の選択はなかったですか？

**皆川** 幸運にも、中原さんなど様々な業界の人達が同時期に始動していたので、「何が始まるのだろうか？」という気分はありました。でも、自分のベクトルで動いているのはすごく感じていました。それまでは誰かのブランドを支持して、そこに勤めて、何となくそ

のDNAを継いでいくという時代だったと思います。でも、そこを経たとしても何か違う考えの中にいたいな、とは思いましたね。自分もファッションの中でいわゆる体制とは違う方向を選んでいくと、結果、実際そうなったように、中原さんや、各業界で自分の方法論みたいなことが湧いてくる人達と繋がったら面白いなとは思っていました。だから、ファッション業界にはあまり関心がなくて、建築やインテリアなど違う分野の方達がどうやって自分を作っていくのだろう、というところに興味がありました。

**中原** そういえば、確かに、小さい所が誕生して今でも残っている所が沢山あります。自分の仲間もそうでしたが、みんな頑張つてらっしゃいますよね。  
**皆川** ところで、プレイマウンテンは何年経ちますか？

**中原** ちょうど24年ですね。2年程個人でやって会社化したのが2000年です。あまり会社というものの在り方が解らないまま会社化してしまったところがありました(笑)。

**皆川** 確かに自分も最初は「経営」とか「経営の仕方」とか考えたこともなく、日銭で材料を買つたり生活に充て

たり、みたいなことからでしたね。  
**中原** 洋服だけではなく、端切れで小物を作られていますよね。とても日本人的な感じがします。小物を作る「端切れの魅力」についてですが、途中から活用していくようになったのですか？

**皆川** いえ、余り布を何かにしようとして最初から考えていました。縫製工場で裁断師が型紙に沿って布をカットして洋服の形を取った後の余りは全部捨てていたのです。現在も多くの工場がそうかもしれませんが、「ミナペルホネン」は全部回収します。魚市場では魚のアラまで料理する人は、腕がいいのです。1kg3000円で買った鯛も刺身だけだと6割か7割の体積しか使いませんが、アラを炊いたり、骨で出汁を取ったりすると1kg3000円をまるまる使えます。余ったモノで何かを作ればそれで更に新しい価値を生み出せます。魚屋の経験と縫製工場の「もったいない」が繋がって、端切れで作る最小面積の「ミニバッグ」は今も変わらない形で製造・販売しています。

**中原** ところで、皆川さんは建築にもご興味がおありですか？

**皆川** 建築は、単純に空間を作るということに対しての、自分の関心事というか、人間も骨格に対して布を被せていく、ある種、布という空間に入るので面白いなあと思っています。建築のように、構造と装飾、身体的なことと精神的なことをひとつの空間の中で造っていくのは、頭がついていきそうにないですが、とても興味があります。フィンランドに行つて、(アルヴァ・)アアルトの存在を知ったことが大きいかもしれません。建築の本は、アアルトはじめ、メキシコの建築家、ルイス・バラガンの作品を撮つたセバスチャン・サルガドの写真集などを購入して、設計図とまではいきませんがスケッチしていました。後に東京都現代美術館で開催した展覧会『つづく』展でも展示しましたが、フィボナッチ数列を基にした渦巻のような家を想定し、「壁がなくても空間が分かれるには、こうしたらいいのかな」というように、立ち位置で空間が変わるようなことを考えながらスケッチしたりしています。

**中原** 建物の面白さというのは、身を置いた時に感じるものがありますね。

**皆川** 洋服のスケールと違って面白い

ですね、白金台店ができる前から、何となく椅子をデザインしたりしていました。

## モノづくりからみる 「国と地域」と「産地」

**中原** アメリカにあるうちのギャラリーでイベントをやった時に話題になったことがあるのですが、産地についてはどう思われますか？ 日本はモノ作りをする上で、比較的産地が残っていますね。産地の文化はどれも大変で、繊維関係がどうなっているのかよく分かりませんが、どんどんシユリンクしていると感じています。

**皆川** ヨーロッパとかアメリカに比べると、そうですね。

**中原** 益子と笠間イベントをやった時、益子の人達が「今回、初めて町中にある窯元を数えたら小さい所も併せて500程あったと言っていました。小さい町の中にそんなにあるのはとてもないことだと思いました(笑)「益子焼」と言っても、益子に住んでいて土は使うけれど仕入れた土や釉薬もあつたり、同じモノを作ったら逆に何か言われたりするようになって「日

本の産地」はどうなっていくのだろうと気にかかっています。

**皆川** ファッションも、ウールだったら愛知県とか岐阜県で、綿だったら浜松と、繊維毎にいわゆる「産地」というエリアは分かれています。詳しくは分かりませんが、分業によって産地という状況が生まれて、お互いが支え合わないと上手くいかない。順番に工程を振り分けていくことで成立しているのを「産地」という状態にしています。自社で完全に全工程が出来たら産地になっていなくても成立しますが、染め屋がいたり洗い場があつたり、それぞれの工程を分業したからその地域に「産地」という状態が生まれているのです。それが年々減っていった結果

「あそこはウールの産地だね」「綿の産地だね」というより、日本全体をひとつの産地に見立てて……見立てるといふか、実際に「ウールで織つたけれど、浜松の工場で洗つといい」とか、逆に「綿で織つたけれど、染めるのは京都の方がいい」みたいになってきました。

**中原** 動かすわけですね。

**皆川** 全国に残っている良い工場が繋がるという状態ですね。今迄は産地の中で完結できたのですが、それぞれが

残っていて、良いクオリティで作れる所が繋がりは始めたという意味では、日本がひとつの産地になったという現状があるのでしょうかね。

**中原** 皆川さんと旅行中、ロサンゼルスでドーサのクリスティーナのオフィスに行きましたよね。あの時、自分達で7割生産していると聞いて何か凄く新鮮に感じました。

**皆川** 今後は、産地を維持しながら自社でも完結出来るという二本立てになっていくとよりいいな、と。そうすると自分達では開発が進むし、その開発を次は産地にシユアできると産業も多少豊かになる可能性もある。どうしても経営が一緒ではないので、相手のモチベーションとか相手のスキルを変えるのは至難の業というところがありますね。

**中原** そうですね。自分が鹿児島で家具を作つて東京で売つて、次に売るだけではなく流通にも興味が出て、ストキストみたいなのを始めて、全体をもっと上手く循環出来て皆がハッピーになれるような、様々なビジネスが継続しやすい環境とは何だろうと思つた時代がありました。産地の人達が、モノづくりをしようとすればする

程苦しんでおられるのを見て、皆川さんはそこ地域にとっても深く関わっていらつしやるので、お話を聞ききできて良かったです。技術を持っている所に渡して繋いでいく感じですよ。それは国内だけですか？

**皆川** 今のところそうですね。でも相当なくなつていっているので、一旦そこを戻せるといいなと思います。

**中原** ブランド名についてはですが、最初の「ミナ」というのは皆川さんの、ミナ、ですか？

**皆川** 「ミナ」は「私」という意味のフィランド語です。僕の苗字とも被つているので「それもいいな」と思いましたが、大事にしたかったのは、当時ブランド名は創業者やチーフデザイナーの名前が多く、次のデザイナーは引き継ぎづらいなと思つて、それで「私」という名前にすれば誰が続いても「私」だし、それを着ている人の服だと思えば着ている服の「私」になるのいいのでは、と思いました。もちろん皆川と被っているのも何となく親和性が出ますし、ちよつと女性的な名前でもありますしね。

**中原** 「ペルホネン」は「蝶々」ですが蝶がお好きなのですか？







対談を終えて

**皆川** 「日本に行ったら是非行きたい」

と思ってもらえる状況を作ることがある種のインターナショナルな状況ではないかと思えます。パリでは各国の人達にコレクションをお見せしていますが、それはある種自分達を測るというか、他の文化圏でどういう反応があるのか、など様々なことを「知る」体験の場ではありません。

**中原** 代表が変わって、今、いかがですか？

**皆川** 社員の皆さんが向かう道を作るのは新しい経営者で、その為の動機やデザインをするのが自分の仕事だと思っています。デザインの仕事がとても増えたのはやりがいとして大きいので

すし、その密度はかなり上がりました。

新しい経営の人が皆と相談して進めている企画会議に参加していないので、あとから「ああ、今はそういう考えなのか」と知るのでありますが、方法論が違っていくというのはとてもいい流れだと思っています。

**中原** そこに違和感はないですか？

**皆川** 違和感はなく「ああ、自分は思いつかないだろうな」と思ったりします。

**中原** 100年時代に「続けていく」ということ、そして、皆川さんの今後の夢をお聞かせいただけますか？

**皆川** 1990年代後半にやり始めた人達が「自分の人生で和了<sup>あがり</sup>を作る」

という思考ではないのは、ひとつの特徴かなと感じています。自分が「100年」と言ったのは、不器用であり人並みに出来ないし自分の和了<sup>あがり</sup>を目指しても、30年や40年で出来る事は知れているので、40年位で誰かに託して「自分はこちらまで」という状況を作った方が自然だと思ったのです。そういう意味で「続ける」というのは鱈のタレ的に継ぎ足していくと味も熟成して、未来や将来への期待が持てるような気がします。「自分がこんなに大きくした」

ではなく、可能性を皆が順番に作っていく、そういうリレーはいいですね。

**中原** 僕も、それがあつたからザ・コンランショップに入ったのだと思います。他人の「タレ」に自ら入ったみたいな感じですよ（笑）

**皆川** 特にザ・コンランショップの代官山はマーケティングで店を作るのではなくて、「新しい暮らしを考えること」が、そもそもザ・コンランショップだったように、再定義のようですが最初に戻っている部分もあって、その両方のミックス感をとっても感じます。そういう意味では、継続するエネルギーを作るといことは僕らのひとつの楽しみですよ。

**中原** そんな皆川さんの「夢」は……？

**皆川** そうですねえ、「続けてくれたらいいな」という臆げなもので、自分の知らない時間軸の中で本当に100年続いていたら面白いし、それは決してこのミナ ペルホネンでなくてもいいし、何か違う産業をやっているかもしれないけれど、「暮らしには必要だよな」「ミナ ペルホネンは昔洋服を作っていたらしい」など、何かデザイナーの力が暮らしに良い影響を与えていることが軸にあればいいと思います。現在の経営者の次の経営の方まで、この世界に一緒にいるかは分かりませんが、期待が持てるのは、十分「夢」ですね。

**中原** 皆川さんは、ファッション業界でも異質な存在で、とても謙虚でいらつしやいます。控えめなところとインディペンデントでやっている人間からすると勇氣をもらえる一面をお持ちです。今日は魚市場と端切れの共通点などいろいろと伺えて良かったです。ありがとうございます。

**皆川** 確かに「インディペンデント」は、ひとつのキーワードですね。ありがとうございました。